

母の散歩

母さん、今日も俺は散歩をしてるよ。暑い日が続く夏の日も、木枯らしの吹く冬の寒い日も、母さんがしていたように毎日散歩をしている。

生前、大きなため息を一つして散歩に出かけていたね。

ため息の理由は、「高齢になって、身体がしんどくて、できればサボりたい。でも健康のためには続けた方がいいのだけれど、でも辛い」という思いがあったんだよね、そう顔に書いてあったよ。

それも毎日、一日に二回も三回も、まるで仕事のように散歩に出かけていたね。

ある時「どうしてそんなに熱心に散歩に行くのか？」と聞いたら「歩けなくなったら寝たきりになったら、家族に迷惑をかけることになるから」とうつむきながら答えたのを覚えている。

そして、八年前、散歩から帰って昼寝をしたまま、サヨナラも言わないで静かに旅立ってしまった。

悲しかったけれど、淋しかったけれど、母さんは本当に家族の誰にも迷惑をかけることなく逝ってしまった。あの時、俺の胸の中に「本望」という言葉が浮かんできたよ。

葬儀の時、弔問に訪れた皆さんに「家族に迷惑をかけたくないと言っていた母は、私たちに少しの迷惑もかけることなく、思っていた通りに死んでしまいました。願いがなかった母は、小さなガッツポーズを繰り返しながら、今頃天国の階段を昇っていると思います。だから今日は涙なしで母を送り出したい」とあいさつした。

今も思い出すよ、母さん。二階の窓から見た冬木立のように痩せて小さくなった母さんが歩いていた姿を。履いていた靴の幅ほどの小さな歩幅でトボトボと、でも一生懸命散歩していたあの後姿を。

七十一歳になった俺も、母さんを見習って一時間ほどの散歩コースを毎日散歩している。俺も家族に迷惑をかけたくないからね。

もう少ししたら、あちらで再会をして、一緒に散歩するのを楽しみにしているよ。でも、その時「どうして毎日散歩してるの」って誰かに聞かれたら、なんて答えようか、今から考えているんだ。